

次代に残したい

都留田の宝物

▶都留市の春は川茂の桜が代表格。春風がそよぎ、光満ちる中、淡い桜の花がいつせいに開くと、わたしたちは春の訪れに、胸を躍らさずにはいられません。



澄みきった青空、やさらかな緑の山々
そして清き流れの桂川。
わたしたちのまち都留は
この豊かな自然をはじめ
素朴な人情、教育尊重の風土が
はやくから根ざした土地でもあります。
21世紀に伝えたい
都留市の“宝”とは――

The treasures of Tsuru we pass on to the next generation.
Clear sky, peaceful green mountains, and the clean flowing Katsura River.
In our town, Tsuru, we have been ahead of the times in respecting our rich nature, education, and human kindness, and in preserving these assets to pass on to future generations in the 21st century.

かけがえのない自然の恵みを 21世紀の子供たちにも伝えたい

どこまでも澄みわたる青空に、子供たちの
明るい声がこだまする我がふるさと都留市。
優美な山々の景観に育まれてきた都留には、
自然の恵みと人々の温もりが溢れています。四
季折々にその表情を変える自然と、ここに暮
らす人々の純な笑顔が、いつも光と風のように
囁きあっています。

やわらかな日差しを浴びて桜の花がいつせ
いに咲き誇り、うす紅のペールが都留の美し
い街なみを包む春。溪流をゆくすがすがしい
緑の風が肌をかすめ、人々が、そして生命が
まぶしく輝きだす夏。くれないに燃える山々
の紅葉は色鮮やかに、大地の恵みは柿が実る
秋。長い影法師にひっそりと咲く寒梅の薫り
美しく、静寂の季節の到来を知る冬。

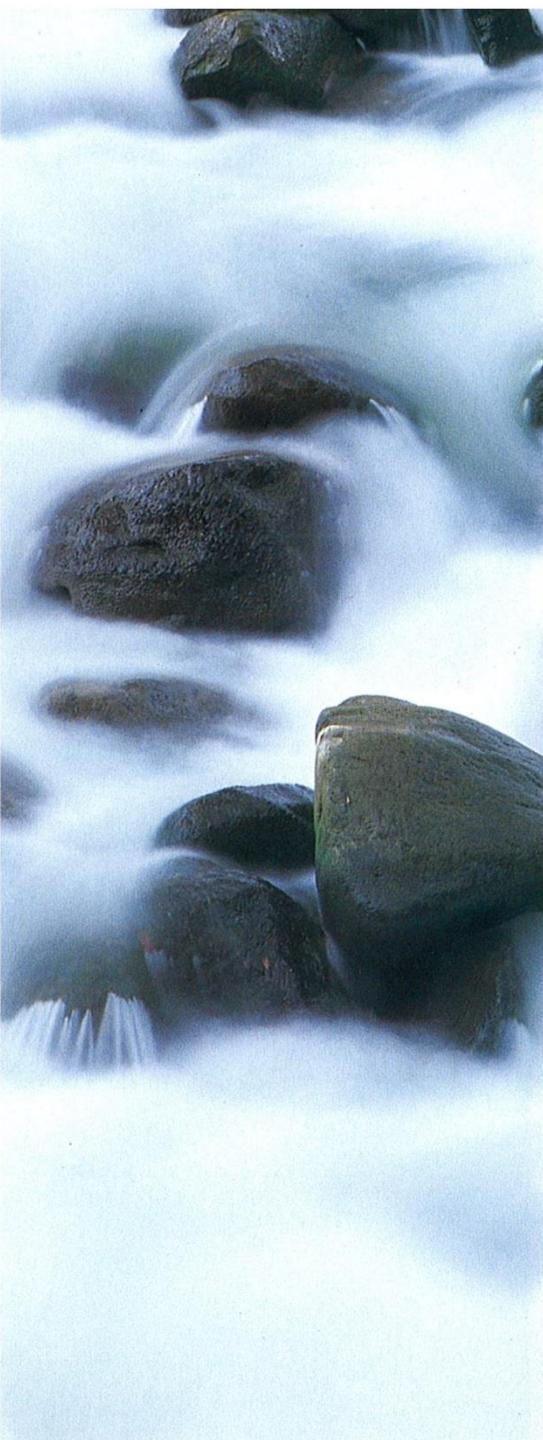
遠い昔から人々を支え続けてきた豊かな自
然と暖かい温もりをいつまでも大切に、そして
限りなく輝ける未来へと、私たちは大きくは
ばたいていきます。

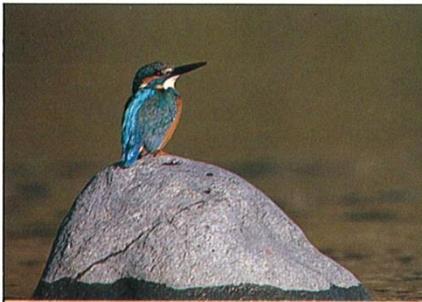


▲次代へ残したいもの――それは何より、このどこまでも澄み渡った青空、そして都会では眺めることのできない、この満天の星空ではないでしょうか。



▲清流でしか育たないワサビ。澄んだ水の中で緑の葉がそよぎます。ワサビ田には冷たく澄んだ空気がピンと張りつめています。

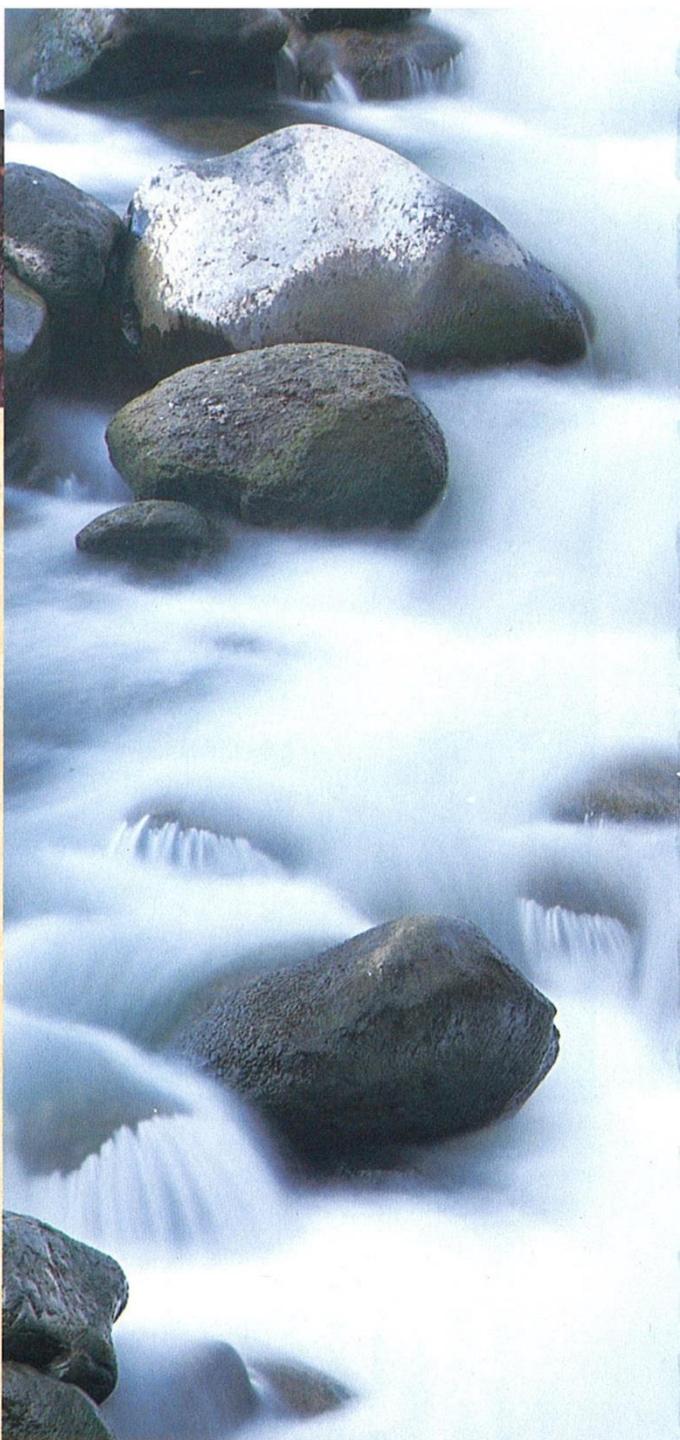




▲カワセミ



▲ムササビ



▲鮎やヤマメの川として知られる桂川。川筋におり立つと、聞こえてくるのは優しいせせらぎばかり。とりわけ夏、セミしぐれがシャワーのように降り注ぐ頃は、涼風に包まれて爽快です。

ひととき、わたくし輝く桂川の生命の光 これこそ市民の変わらぬ希望、 願いなのです

美しい山々に包まれた都留市は、自然が息づく風光明媚なふるさとです。情緒に溢れた緑深いその谷は、美しい清流をつくり、古来から産業と文化と心の潤いを与えてくれました。

まちの中央部を東西に貫き、富士の雪どけ水がつくりだした桂川は、山ふところを這うように下っていきます。この桂川周辺は全国でも有数のバードウォッチングの盛んな地で、清流の宝石と呼ばれるカワセミやキビタキ、川の南側の鹿留山のふもとにはイヌワシが住

んでいます。また、市民に愛されその努力によって元気に生息しているムササビをはじめ、多くの生物がいきいきと自然の営みとともに暮らしています。

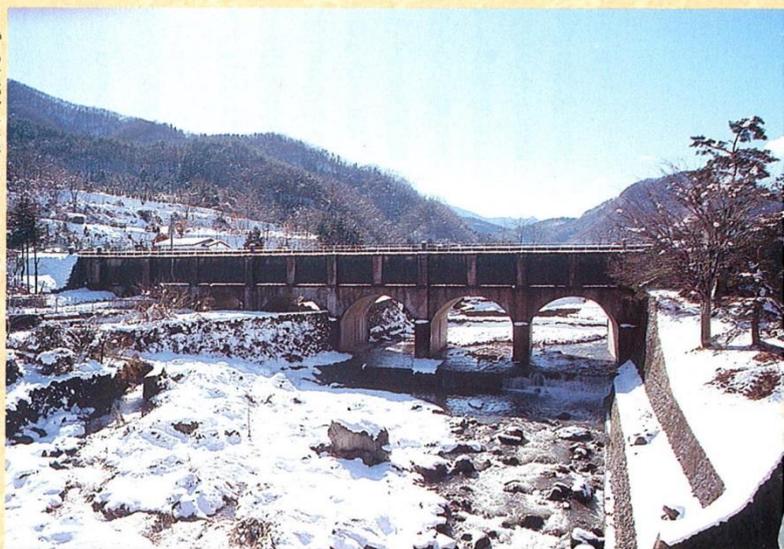
生命と自然を尊ぶ都留は、桂川のせせらぎのごとく時の流れの中で緩やかに変貌してきました。しかし、いつまでも自然の営みと人々の優しさは変わりません。その変わらぬ表情の豊かさや温かみは、都留に住む人々の願いなのです。

だれもがふっと絵を描きたくなる
そんな気持ちにさせるまち



▲都留市出身の世界的な画家、増田誠画伯がふるさとを描いた「雪の日」

▶雪の東電水路橋。青空と、一面に降り積もった真っ白な雪のコントラストが目眩しいほど。思わず足を止め、見入ってしまう光景です。わたしたちのまちには、そんな風景がいたるところに広がっています。





歴史と文化が息づくまちだから
とっっても郷土愛が深いのです

次代に残したい
都留の宝物

▲江戸時代の初期から連綿と受け継がれてきた「八朔祭」。毎年9月1日に行われ、昭和57年からは大名行列も復活して、まちは祭り一色に塗りつぶされます。

恵まれた自然環境のもと、美しい住宅街を形成している都留市。かつてこの地にまかれた文化の種は、時とともに熟し、豊かな文化遺産として受け継がれてきました。ふるさとに刻まれたこの文化的伝統が、今も脈々と流れていることは、都留に住む誰もの喜びであり、誇りとなっています。そんなふるさととの風土の息吹を感じるこの幸せを、いつまでも大切に守り育てていくことは、私たちの使命であり願いです。

都留市では、四季を通してまちのどこかで祭りや伝統行事が行われ、笛や太鼓の音が響いています。毎年9月1日に行われる生出(おいで)神社の秋の例祭「八朔(はっさく)祭」は、都留を代表する祭りの一つです。その歴史は古く、江戸時代初期から連綿と受け継がれてきました。祭りのハイライトである総勢130名にも及ぶ大名行列は、農民たちが五穀豊穡の願いを込めて格式十萬石の大名行列と見立て、古式にのっとり「下ニイ〜下ニイ〜」と市内に繰り出すものです。

車輪を修理している写真



▲八朔祭に参加する人。見物する人。立場は違ってもこの中には強い郷土愛。都留に住んでいて良かったな、と感じる祭りです。

300年の伝統産業に息づく心と技 いまハイテクを生かしてより高度に



▲300年の伝統が生きる技、そして心。華麗な甲州織。



▲デザインもコンピューターグラフィックを使用して、より高度な織物づくりが進められています。

300年の歴史をもつ甲州織。清冽で豊かな水資源は、古くからこの地で機業を育て、都留市はその中心地として発展してきました。江戸時代の寛永9年(1632)、秋元但馬守が谷村の藩主となって以来、養蚕と織物の振興がはかられ、その長い歴史を歩んできたのです。

漂う波のように変化する色彩ゆえに、またその光沢が海から上る水蒸気に似ているゆえに、「海気(かいき)」と呼ばれ、明治の初めには全国の70%を生産し、やがて「甲斐絹」と名前を変えていきました。甲斐絹は、新たな素材の開発により姿を消しましたが、この伝統と技術は、現在にしっかりと受け継がれ、甲州織として高く評価されています。

甲州織独特の美しさの秘訣は「先染め」にあります。原糸の生糸や科学繊維などを織る前段階で、糸に染色するこの技術は厳格な工程とカンの作業です。糸を先に染めるため、その織物には実に深みのある色や独特の変化があり、甲州織の特徴となっています。

甲斐絹の長い伝統と確かな技術が織り上げた甲州織ドンス地は、日本古来の紋様を現代の感覚にマッチさせ、鮮やかに蘇らせた優美で豪華な婚礼寝具として、全国で愛用されています。近年その生産過程も家内工業から脱皮し、ハイテク機器の導入などにより世界に誇る近代的工場で、美しく高度な織物づくりは、量産体制へと移行しています。

織機を操作している写真

▲甲州織の名で広く知られる都留の織物。近代化が進んだ織物工場ではコンピューターが導入され、スピード化が図られています。



▲尾県郷土資料館の内部

悠々の時を紡ぐふるさとの遺産 いにしへ人の心を未来へ

次代に残したい
都留の宝物

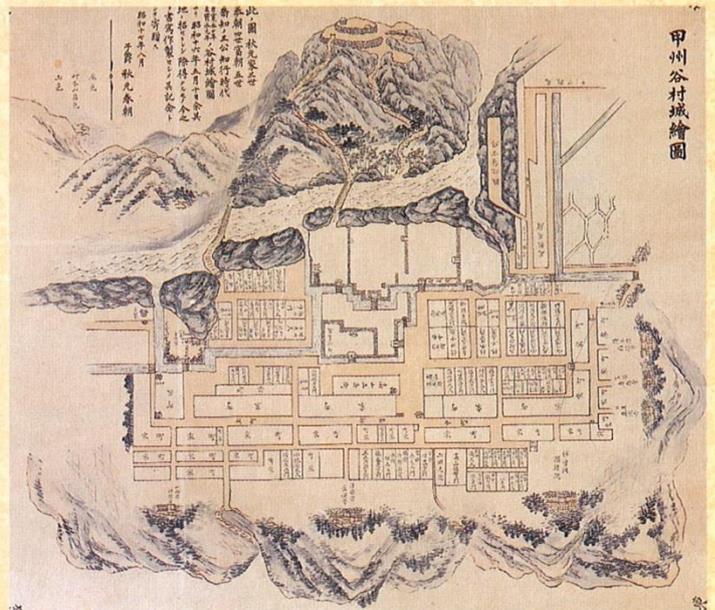
都留市の中心街谷村は、城下町として栄え、甲府につぐ政治・文化の中心地として発展してきました。天保・嘉永年間には教諭所や興讓館などの教育機関が設置されましたが、こうした文化尊重の気風は、現在も都留文科大や「SANTI・キャンパスタウン都留」構想などに受け継がれています。

市制施行後の都留は、急速な繁栄を示し、全国的にも自然と調和したすばらしい都市として評価されてきました。さらに中央道の開通により首都圏域に入り、地場産業と新しい文化が融合した、文教都市として発展しています。

古くから城下町として栄えてきた都留市には、かけがえのない文化遺産が数多くあります。これらの文化遺産は長い歴史の波にもまれながらも、私たちの祖先が伝え残してくれた貴重な財産です。

▼甲州谷村城絵図

秋元公三代居城のこの絵図は、谷村(館)と勝山城を合わせて一城としているなど、当時のようすがうかがえます。谷村大堰の整備されている有様もはっきり描かれている貴重な絵図です。



甲州谷村城絵図

◀尾県郷土資料館(県指定文化財)

建物は明治11年に建築された藤村式建築で、県下でも貴重な文明開化の遺構となっています。昭和48年12月に建物復元工事が実施され、明治から昭和までの資料約250点が展示されています。





▼太宰府天神社の彫刻

伊豆の彫刻師、小沢半兵衛とその息子福田藤右衛門（俊秀）によって、江戸末期に彫工されたものです。天野家の一室で長期にわたり丹念に彫られた、みごとな作品です。



▲太宰府天神社



▲小山田越中守信有画像（市文化財）

別名出羽守ともい、武田信玄の父信虎らとともに戦国時代に活躍した武将で、大儀山長生寺(羽根子)の開基です。画師は不詳ですが、当時の画法を今に伝える秀逸な画像です。



▲八朔祭屋台後幕（市文化財）

八朔祭では、氏子の若衆たちが競って豪華な屋台幕を飾った山車を繰り出しました。この中の「鹿島踊」「虎」「牧童牛の背に笛を吹く」の原画は、文化年間の有名な浮世絵師葛飾北斎によって下絵が描かれたといわれています。

